二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

黒薔薇の騎士 II 聖奴隷ローザ

小説 筑摩十幸
挿絵 助三郎

第一章　堕獄の女帝　007
第二章　再会の白き剣士　039
第三章　屈辱のエクスタシー　055
第四章　淫虐闘技場　083
第五章　淫靡なるイノセンス　117
第六章　競艶・百合と薔薇　180

登場人物紹介

Characters

ローザ・フリージンガー

亡き父のあとを継ぎ、シュバルト神聖帝国を治める騎士皇帝。しかし魔女の疑いをかけられ拷問の末、教皇の奴隷に堕ちる。

ブリジット・ローゼンバーグ／白百合の剣士

ランドール領王国を治める王女。「白百合の剣士」と名乗る仮面剣士に扮し、ルハサン連邦の侵略に抵抗している。

アルベルト

ローザの父の双子の弟。神聖教会の教皇の地位に就きながら、メリルと通じて自らを魔族化。その力を用いてローザを陥れた。

ヨハン

神の血を引く「御子」としてシュバルト神聖帝国で守護され、崇められている少年。ローザを慕う。

メリル

あどけない姿に反し、邪悪な魔力を用いてローザの肉体を狙う謎の少女。

『第三章　屈辱のエクスタシー』より

「聖帝様が香水を……ですか？」
いつも厳つい鎧に身を包んでいる女皇帝が香水を使うことは滅多にないため、大臣たちは興味深げにローザを見つめ、一斉に鼻をヒクつかせた。
「あ、あ……これは……」
言い訳の言葉も思い浮かばず、ローザはしどろもどろだ。変質されているとはいえ、もとはオシッコの匂いに他ならない。それを嗅がれていると思うと激烈な羞恥に身体を焼き尽くされそうだ。叱られた子供のように俯き、モジモジとお尻をくねらせる。
「ふむ、そう言われれば甘酸っぱいいい香りがしますな」
「爽やかでありながら蠱惑的な、不思議な匂いです」
口々にオシッコの匂いの感想を言われて、ローザは身も世もない羞恥に苛まれ続けた。今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られるが、今は我慢するしかない。頬はもちろん耳まで赤くして俯くローザを見て、聖帝様もお年頃なのだと軽口を叩く者もいた。百名もの一般議員たちも興味深そうにローザ一人を見守っている。
「何でも牝鹿の小水から作るそうだ。男心をくすぐる魅惑の香りだな」
アルベルトの一言一言にドキドキさせられ、腰をもじつかせるローザ。
「わ、私の香水の話など今は関係ない！　人の顔をジロジロと見るなど失礼だろう。に、匂いも嗅ぐな！　もっと議題に集中しろっ」
話題を逸らそうと強い口調で叱責するローザ。だが内心は心臓が破裂してしまいそうなほどのスリルに襲われていた。家臣たちにオシッコの匂いを知られてしまったと思うだけ

で、胸が締めつけられ動悸が速くなる。鎧の下で腋の下にジットリ汗が湧く。
ひょっとしたらとっくにお漏らしはばれていて、慌てる自分を嘲笑しているのではないかという気までしてくる。
（しっかりしろ……大丈夫……ばれていない……大丈夫だ）
心が弱まるにつれ、かつての洗脳調教の影響が現れつつあった。ブリジットから与えられた術式も、本人の精神力次第なのである。
（なんとかしなければ……うっ!?）
そのときオムツの中で何かがもぞりと動いた。それは生温かい粘体のような感触で、秘園からお尻までを覆い尽くすほど。もぞもぞと動いているだけに濡れたオムツの感触よりも不気味だった。
（なんだこれは……いつの間に……っ!?）
動揺を浮かべるローザの顔を教皇が面白そうに覗き見る。
「そいつはお前の小便からできたスライムだ。なかなか楽しませてくれるぞ」
「な、なんだと……!?」
魔法で生み出された尿水はただの液体ではなかった。オムツの中で不定形生物へと進化していたのだ。あれほど漏らしたにもかかわらずほとんど外に染み出さなかったり、匂いが変わっていたのはそういうことだったのだ。
（こんな下等な魔物に……！）
スライムといえば原始的な軟体動物で、死肉をあさるような下品な生き物である。そん

なものが自分の最も大切な生殖器官に貼りついているなど生理的に許せなかった。しかし敵がいるのは封印されたオムツの中。オムツを外さない限り手を出しようがないが、ここで外せるわけがなかった。

スライムは無数の突起を持つナマコのような姿になり、ジワジワと前から後ろへと移動していく。クレヴァスに沿って細く伸びたスライムが褌状にワレメへとギュッと食い込むと、そのまま前後に小刻みな震えを見せる。

ゾクゾクゾクゥッ！

無数に生えた柔突起が肉の合わせ目をなぞり、抉り、くすぐってくる。大量失禁で蒸れて、敏感になってしまった肌にはたまらない刺激だった。

「ううぅ……くぅ……そんな……ひ……う、ぅぅ……」

クリトリスの包皮がクルリと剥き返ってしまい、敏感な肉芯が姿を晒される。ラヴィアを左右に押し広げられ、膣の入り口を暴き出される。そして剥き出しになった媚肉に、柔突起が次々に食い込んできた。突起は波のようにスライムの上を流れて移動するため、まるでイボだらけの滑り台の上を滑らされているような感覚だ。

クチュッ……グチュチュッ……ジュルッ……ズズズッ……。

イボの波が通過していくたび、股間から脳天まで快電流がビリビリと突き抜けて、お尻が浮き上がりそうになる。外から焙られ加熱していく粘膜を挟み撃ちするように、膣内に埋まった悪魔像も振動を強めてきた。

ヴィィィン！　ヴィィィン！　ヴィィィン！　ヴィィィン！　ヴィィィン！

「うう……あぁ……はあはあ……あぁ……あぁぁ……っ」
一度妖魔の調教を受けた身体は、かつての絶頂体験を呼び起こされてしまい、過敏なまでに反応してしまう。
強烈な振動が下腹全体を震わせるたび、掻き混ぜられる膣肉がドロドロに溶けてしまいそう。収縮した膣孔から牝蜜がドプッと溢れ出し、オムツの中に溜まっていく。動悸が速まるにつれ体温が急上昇し、勇ましい鎧の下、牝肌は夥しい汗にグッショリ濡れてしまう。
「皇帝陛下から連邦との同盟について意見があるそうだ」
さらにローザに恥をかかせるつもりなのか、アルベルトがいきなり話題を振ってきた。
（く……同盟など……反対に決まっている……！）
「聞かれるまでもない……わ、私は……連邦との同盟に……はぅっ！」
発言の途中、ローザはいきなり椅子を倒して立ち上がった。オムツの中で暴れていたスライムが肛門に触手を伸ばしてきたのである。そうとは知らない家臣たちは、起立したローザを見て、よほどの決意なのだろうと固唾を呑んで見守った。
「はあはあ……わ、私は……」
言葉を探すように喘ぎ、頬を紅潮させた姿は、普段の皇帝が見せない妖艶なまでの色香を漂わせている。それは表面的な美によるものではなく、ローザの身体の内奥から滲み出してくるようだった。ダンスのように左右にくねる腰の動きも悩ましく、その美しさに男たちは見とれてしまう。まさかオムツの中をスライムに責められ、失禁地獄に突き落とされているとは夢にも思わない。

「う、ううう」
その間にも、スライムは蕾の中心をこじ開け、その魔手を肛門内へと滑り込ませようとしていた。
（やめろ！　そ、そこは！）
アヌスはローザの最大の弱点だ。薔薇の刻印を打たれ、膣肉に匹敵する快楽器官へと造り替えられてしまった肛門粘膜。そこを責められると自分が自分ではないような錯覚に襲われ、わけがわからなくなってしまうのだ。このままでは再び洗脳状態にされてしまう。
（それだけは……）
慌てて肛門括約筋を締めつけ、スライムの侵入を阻止しようとする。レモンの先端のように硬く尖ったアヌスは、寸前のところで侵蝕をはね返した。
「無駄だ、ローザ」
「ひっ!!」
いきなり尿道に突き刺さる灼熱感。スライムの一部が細触手に変形し、尿道に食い込んできたのだ。思いもよらぬ攻撃を受けて、思わず爪先立ちになってしまう。
「うぐうっ！　そこは……あぁぁ……っむぅ」
小さな珠を連ねたような触手がズルッズルッと潜り込んできて、悲鳴を呑み込んだ喉を引き絞る。排尿のときを上回る灼けるような快感が尿道を焦がしながら媚肉にも燃え移り、勢いを得たスライム本体が、鋭い肉槍となって肛門を貫いた。
「――――――ッ」

媚肛を貫通された瞬間、ローザは背中を反らせて仰け反った。振り乱れた銀髪が扇状に広がって、光のカーテンの如く煌めく。

さらに直腸内に入ったスライムは極太の責め具となって腸腔をグリグリと掻き混ぜる。腸襞を捲り返らせ、舐め尽くしながら、秘められていた願望をほじくり返そうとする。

（熱い……お尻が……燃えてしまう！）

「ああ、あぁ……っ」

抜き差しされるたびガクガクとお尻が震え、強張る手指がテーブルを引っ掻いた。激しい肉体反応はそれまでとは明らかに一線を画すもので、いかに自分が肛門責めに弱い身体にされてしまったのかをローザは思い知らされた。

「どんなに気取ったところでお前は調教済みのアナル牝。闇の快楽を味わうがいい」

数珠触手がさらに尿道を犯し、膀胱にまで侵入されてしまう。そこでドロドロの粘液へと姿を変え、膀胱内に満ちてくる。

「はうぅっ！　ああ……そんなぁ……」

爆発的に膨らむ尿意と比例して直腸内のスライムもムクムクと体積を増し、奥の奥までローザの肛門を犯すのだ。それはもう触手というより勃起したペニスであった。

「ううむ……私は……うう……あぁぁぁ……」

ズンズンと突き上げられる直腸に肛悦が爆発的に膨らんでいく。恥辱の波紋を身体の内側に刻まれ、骨盤がグズグズに溶けて崩れ落ちてしまいそうだ。

さらに魔液を注ぎ込まれる膀胱がパンパンに膨れ上がり、子宮まで痺れさせる。収縮し

た襞肉が悪魔像を食い締め、奥へ奥へと呑み込むような動きを見せた。三つの孔すべてを快楽で支配され、頭の中がまっ白になる。
「う……あぁ……ンン」
美貌が赤くなったり青くなったりを繰り返し、噴き出した汗が綺麗な額を滝のように落ちていく。膝がワナワナと震え、立っているのがやっとの状態。これでは逃げ出すことも不可能だ。
「ローザ様？」
「ローザ様、大丈夫ですか」
あまりにも異常な主君の様子を見て、部下たちは騒然となる。百人もの男たちの視線が一斉に聖帝に集中した。
「うぁ……なんでも……ない……だから……はあはあ……見るな……そんなに……ンああぁ……私を……ああぁう」
懸命に声を出しても、明らかに異常な様子はますます衆目を集めてしまう。無数の視線に貫かれながらも肉体の暴走は止まってくれない。むしろその視線が得体の知れない昂奮を呼ぶ。
聖帝としてのプライドに守られた胸の奥、何かがドロリと蠢いた。それはまだ小さなさざ波にすぎないが、いつか大きなうねりへと成長していく予感を孕んでいる気がした。
（どうして……こんな恥ずかしいのに……）
ズブッ！　ジュブブッ！　ズブズブズブッ！

「あひ……んぐぐっ‼　あっ、あっ……ふむぅっ‼」
官能の昂ぶりに合わせるようにスライム男根はさらに勢いを増し、膣内の悪魔像と擦れ合う。アナルの深く重い振動が背後から子宮を焙り、膣肉の甘美な痺れが直腸を揺さぶる。二穴の快感が交錯し混ざり合い、ローザを一匹の牝へと変えていく。
さらにドクドクと粘液を送り込まれる膀胱は限界以上の尿意に破裂寸前だった。それでも触手に堰き止められて、失禁することも許されない。あまりの狂おしさに腰がクネクネと揺れ始める。オムツをつけていることがばれてしまうかもしれないが、止められなかった。
「ハアっハアっ……も、もう……」
瞼を震わせ、半開きの唇から甘えるような吐息が漏れ出す。衆人環視の中、排尿欲求と溶け合った二穴責めの快感がかつてない高みへとローザを連れ去ろうとしていた。激熱に脳を焙られ、理性の糸は矢が放たれる寸前の弦のようにギリギリまで引き伸ばされていく。
そんな極限状態にありながら、ローザの女は鮮やかなほどに開花していた。しっとり濡れた膣襞が悪魔像全体を包み込み、甘く揉みほぐす。肛門括約筋が何重もの狭窄を作り出し、スライムペニスをキリキリと締め上げる。化け物と道具が相手だというのに、男を歓喜させる牝の媚態が無意識のうちに発現してしまう。
「フフフ。いい表情だ。どうだ、止めて欲しいかね？」
意識が朦朧としたところに囁かれ、ローザは無我夢中でガクガクと頷いていた。罠だと気づかずに……。

「フフフ。どうやら皇帝陛下は連邦との同盟をお望みだ」
（ち、ちが……）
反論しかけたとき、スライム男根が直腸最奥までぶち込まれた。ビクビクッと痙攣が走り抜け、次の瞬間、
ドビュウウッッ！　ドクドクドクドクッッ！　ビュルルルルッ！
「ヒィィ〜〜〜〜〜〜〜ンンッ!!」
スライム男根内に溜まっていたオシッコが一気に腸内に流し込まれる。濁流はとぐろを巻きながら直腸を駆け上がり、聖帝の身も心も焼き尽くしていく。灼熱の閃光に肛門から脳天まで串刺しにされ、ローザは両手をテーブルについたやや前傾の背筋をピーンと伸ばした。
さらに追い打ちをかけるように尿道を犯していた数珠触手がズルリと引き抜かれる。膀胱を内側から圧迫していた媚毒粘液が、尿道を捲り返すほど押し拡げ、間けつ泉のようにオムツの中に噴き出した。
「ヒギィィィッ！　も、漏れる！　漏れちゃうぅっ！」
プッシャアアアアアアッ！　ジョロロロロォォッ！　ビュッ、ビュルゥッ！
尿よりも粘性が高いぶん、尿道を震撼させる放尿快感もこれまでと比較にならないほど大きかった。しかもそれが延々と続くのである。灼熱の白濁液をビュッビュッと搾り出すたび、射精を超える快感が尿道から膀胱を貫いて子宮を直撃する。白濁はオムツの中に大量に溜まり、オムツカバーの前が膨らむほどだ。

『第四章　淫虐闘技場』より

「あああぁぁぁっ!!　な、中で……動いてるぅっ！」
子宮を直接揺さぶられて悲鳴が弾ける。しかし堕落の王女に慈悲の心などない。
「もっともっと感じましょう」
ブリジットも欲情しているのだろう。プリプリと引き締まった臀丘を右へ左へリズミカルに舞わせ始めた。子宮枷の金鎖が光を反射して揺れるたび、連結されたローザの子宮に凄まじい快感が流れ込む。
ズリュズリュズリュッ！　ジュプププッ！　ヌルヌルヌルウゥッ！　ヂュププゥッ！
「ひぃっ！　ンあぁぁっ！　う、動くな……ああ……鎖……ひ、引っ張られてぇ……うあぁぁぁぁン……痺れるぅッ！」
女の中心を直接責められ、ローザはビクンビクンと牝腰を痙攣させた。子宮の中でとぐろを巻いた子宮枷の鎖が、ズルズルと引きずり出されていく。滑らかで複雑な鎖の節が子宮口をくぐり抜けるたび、子宮がキュンキュンと疼いて縮み上がった。
「どう？　こんな風に引っ張られると……あっ、あぁぁん……たまらないでしょう？」
自身も鎖による快感を味わいながら膝を伸ばし、お尻をグイッと高く引き上げる。
「あひぃぃ――――――っっ！」
ジャララッと音がして、子宮口の裏側に先端を引っかけたまま、鎖はピーンと張りつめる。子宮を内側から犯されているような激感で、頭の中が一瞬まっ白になった。
神経を直結されてしまったように、高圧電流のような快感が子宮からダイレクトに脳に響く。これまでの三本の鎖とは桁違いの快感だった。根本的に深度が違う。肉体のみなら

ず魂まで繋がれてしまったような絶対的な強制快楽。少しでも刺激を少なくしようと思えば、ブリジットの動きに合わせて腰を振るしかない。

「っく……あ、ああっ、あああん……だめ……そんな……激しい……あひゃうっ！」

上下に並んだ花びらはどちらもグズグズに濡れそぼって、連結金鎖を通じて愛液を交換し合っている。ローザの熟した南国果実のような媚肉も、ブリジットのもぎたてのフルーツのような花びらも、どちらも魅力的で一時も目が離せない。愛液にまみれた金髪と銀髪のヘアが絡み合うのも、それが一国の姫と皇帝と思えないほどいやらしい光景だ。

「アハハッ！　その調子ですよ……ローザ様。ほらほら……みんなの見ている前で、もっと無様に、もっといやらしく踊りなさいよ！」

すっかり発情状態の白百合の剣士は腰を様々な角度に上下させた。ローザもその動きに追随させられ、ブリッジを描く下半身がカクンカクンと振幅する。淫裂はさらにパックリ割れて夥しい牝蜜を飛ばし、美麗なラヴィアのさらに奥のほうまでもが、衆目に晒されてしまう。

（ああ……こんな恥ずかしい姿を……見られて……）

激烈な羞恥に思わず腰が引けそうになるが、子宮枷に引っ張られては、屈辱ポーズを崩すことも許されなかった。ある時は激しく、ある時はじっくりと、淫らで妖艶なペアダンスは観衆を魅了せずにはおかない。

「どうやらローザ様が先にイキそうですな」

「グフフ。あの聖帝が輪姦されるとは、こいつは面白いことになってきた」

異様な熱気が場内を満たし、男たちはギラギラした目でローザが堕ちる瞬間を今や遅しと待ち構えている。中には待ちきれず勃起をしごいている者もいた。
（ああ、あ……このままでは……また男たちに犯される……それだけは……）
汗まみれの身体に小刻みな痙攣を走らせながら、ローザは必死にこらえ続ける。見知らぬ男たちに次々に犯され、身体の穴という穴に精液を注ぎ込まれるなど、想像しただけで死にたくなる。
『ここでお客様にもお手伝いしてもらいましょう』
アルベルトの他に何人かの客が選ばれ、ステージに上がってきた。男たちは奴隷の絆を結ばされた秘孔や美貌を見比べては、ニヤニヤと嗤う。その手には野太い張り型が握られており、極上の獲物を責められる悦びに表情は緩みっぱなしだ。
「うう……貴様たち……何をする気だ……ハアハアっ！　ま、まだ私は負けてない！」
「とっくに勝負はついているではないか。あまりお客を焦らしすぎるものではないぞ」
アルベルトの指示で大使たちは二人を囲むようにポジションを決め、背後を取った大柄な男が、黒光りする張り型を手に取った。長さも太さも通常男性の倍近い大きさで、表面に這う血管までも再現されている。
「ヒヒヒ。負けていないと言うなら耐えてもらいましょう。しかしイったら、すぐさま我々の相手をしてもらいますぞ」
昂奮で声を震わせながらディルドウの狙いを定める。狙うのはもちろんローザの媚肉だ。
「ひっ！　い、今は……ああ……や、やめろ……卑怯者ぉ！　うああっ！」

グチュッと鋭い先端を押し当てられ、ローザは悲鳴を上げた。子宮枷の責めですでに絶頂寸前なのだ。この状態で責められたら一溜まりもないだろう。そうなれば恐ろしい輪姦が待っている。イヤイヤと必死に首を振っても、肝心の下半身は呪鎖のために動かすことができなかった。

「参りますぞ、聖帝様！　ヒヒヒ！」

ズイッと突き出された張り型が、花びらを押し分けて媚孔に食い込む。

「うああ……あ、あああっ、あきゃああぁぁぁ〜〜〜〜っ！」

鎖と擦れ合う感触にローザはおとがいを突き上げて仰け反った。振動が鎖を通じて胎内に直接響くのである。まだほんの先っぽだというのに、腹の底に響く衝撃は凄まじく、呼吸もままならない。

（すごい……こ、これが……子宮枷の……）

悪魔的な拷問具の恐ろしさを改めて実感し、火照った肌に冷たい汗がヒヤリと流れる。

「いやらしい顔をしてますな。お堅い聖騎士様も、実は欲求不満だったと見える」

「本当は大勢の男たちに嬲られるのが楽しみなのでしょうな。あんなに涎を垂らして張り型をくわえ込んでおる」

「ち、ちがう……あぁ……そんなこと……思ってない……死んでもイヤだっ！　うぁん」

卑猥な言葉を浴びせられ、ローザは自由のきかない身体を藻掻かせる。しかし身体の反応は男たちの言う通り、発情しきった牝のふしだらさだ。

「隠しても無駄ですよぉ。ンンッ……私にはわかります。こんな風にぃ……オ、オマ〇コ

まで繋がっているんだからぁ」
　気持ちよさそうにクイックイッと腰を振り、甘美な拷問を続けるブリジット。正義の象徴であった白い仮面も、こういう状況では淫欲の象徴に見えてくるから不思議だ。
「ヒヒヒ。諦めて気をやるのだ。狂うまで輪姦でよがらせてやるぞ」
　張り型が一気に根元まで押し込まれ、鎖に責められ敏感になった子宮口にズシンとぶつかった。いっぱいに拡張された膣孔の中で二つの責め具がゴリゴリと擦れ合う。
「ンはぁぁンッ！　そんな……やめ……う、あぁぁっ！　く、鎖と……ンああぁぁ……こ、こすれて……あぁぁ……頭が変になるぅっ……ヒィィン！」
　灼けた鎖に子宮口を擦り上げられると、意識が飛ぶほどの強烈な快美が炸裂して、瞼の裏が真っ赤に灼けた。さらに埋め込まれた張り型も子宮の底を抉るように連続で撃ち込まれる。
　ズンッ！　ジュブブッ！　ドスッ！　ズルズルズルゥゥッ！
「あああああぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～～っ！」
　子宮を揺さぶる激震に頭の中がまっ白になっていく。官能の高波が後から後から押し寄せて骨も筋肉もバラバラにされてしまいそう。
「はあはあ……大勢の男たちから愛されて、ローザ様の大好きな……あぁん……おチンポもザーメンミルクも……いっぱいもらえるんですよぉ。あっ、あっ……素敵なことでしょ」
　朦朧としてきた意識に、ブリジットの言葉が蜂蜜のように絡みついてくる。それと同時に子宮枷の鎖から、洗脳暗示の呪力が流し込まれてきた。

「あんなに気持ちいいこと、どうして拒むの？　んふぅン……ローザ様もそうだったはずよぉ……はぁはあ……んっ」
輪姦の恐怖の中にも目眩く絶頂体験を掘り起こされ、妖しいざわめきが下腹の奥を熱くする。鎖をくわえ込んだ蜜肉に得体の知れない期待感が充ち満ちてくる。肉体はおぞましい責めを望んでいるというのだろうか。
「ああ……ちが……うぅん……気持ちいいなんて……お、思ったことない……んはぁっ」
悪魔の誘いを振り払おうとブンブンと首を振りたくるローザ。しかしそんなことでブリジットの声を遮ることはできない。思考は鎖を通じて直接子宮に流れ込んでくるのだから。
「隠しても無駄だ。お前はチンポ好きのマゾ女ではないか」
いきなりアルベルトのペニスを鼻先に突きつけられ、ローザは一瞬声を失う。不気味なイボだらけの男根から濃厚な牡のホルモン臭が漂ってきて、頭がクラクラしてしまう。
「あ、ああ……」
おぞましいはずなのに嫌っていたはずなのに逞しい異形の勃起を見ていると舌の根に甘い唾が湧いてくる。喉の奥がひりついて、何かを深くくわえ込みたくなってくる。
「欲しいんでしょ。濃くて臭いドロドロのおチンチンミルクが」
「はあぁ……あ……わ、私ぃ……ああぁ……欲しくなんか……ンン……」
鼓膜の裏を、左右の脳の脇を魔性の声にくすぐられるうちにローザの瞳から光が失われていく。精神が奇妙な浮遊感に包まれ、肉体と分離していくような不思議な感覚。
自分が自分でなくなっていくよう。すべてをブリジットの声と子宮枷の淫らな振動に委

ねてしまいたくなる。しかもそれが心地よい。
「これが欲しいのでしょう、ローザ様」
周りの男たちも勃起ペニスを軽く擦りながら、見せつけてくる。さらに強い淫臭が渦を巻き、ローザを包み込んでいく。
「欲しくなんか……ああ……ない……おチンチンの……ミルク……なんて……」
言葉と裏腹に、得体の知れない衝動に突き動かされ、ローザは宿敵の男根に舌を伸ばしていた。自分が下品な言葉を口にしていることも気づかず、長い舌をしなやかに動かして、巨根を磨いていく。
（ああ、私は何を……）
自分で自分がわからなくなってくる。嫌悪感は消えていないのに、舌に感じる鉄のように硬い灼熱棒が愛おしくてたまらなくなってくる。
「ウフフ。ローザ様がこの世で一番好きなモノはおチンポよ」
腰の捻りで鎖を操りながら何度も繰り返し囁き、理性の自壊を迫る白百合の剣士。強烈な絶頂快楽とともに暗示を植えつけるつもりなのだ。
「ペニスが大好きだと顔に書いてあるわい。身体は正直じゃ」
張り型を操りながら老大使がゲラゲラと嗤う。幾重にも重なる膣襞が鎖とともに極太の責め具にきつく絡みつき、動かすのが困難なほど。早くそこを味わってみたいという欲求が、責めを加速させる。
「ああっ！　ち、ちがう……ああ……おチンポなんて……好きじゃないわっ！　あ、ああ

ぁぁ……おチンポなんて嫌いよ……あああ……ンっ！　オ、オマ〇コ痺れるぅっ！」
抵抗しつつも卑猥な単語が混じるのは、子宮枷の洗脳効果だろう。鎖のねじれが直接子宮に伝わり、まるで子宮をギュッと搾られたようだ。そこに撃ち込まれる律動で腰椎がグンッと反り返り、緊縮した膣孔からドクッと淫蜜が溢れ出す。理性を失った唇がアルベルトの肉幹を這い回り、イボの一つ一つにもチュッチュッと口づける。
独特の塩苦さとともに、これまで味わわされた快感調教が頭の中、走馬燈のようによぎり、被虐の昂奮が子宮を疼かせた。
「なんてエロい顔なんだ」
「見ているだけじゃ我慢できねえ。このブロンドを使わせてもらうぜ」
周りの男たちは二人の肌や髪の毛に勃起を擦りつけてくる。灼けた鉄のような淫熱、獣のような性臭、荒ぶる牡の欲望が肌に染み込んできてローザをさらに混乱させた。
「アン、こんなに大勢の男がローザ様の身体に夢中になっているわ。ウフフ。誇らしいでしょ？　昂奮するでしょ？」
「あ、あぁあ……みんなが……ハアハア……私に……ンン」
男たちのぎらつく視線を意識すると、ゾクゾクッと戦慄がうなじを駆け上がる。意識はトロトロに溶かされて、今にも身体からこぼれてしまいそうになる理性に必死にしがみつく。認めたら本当に堕ちてしまいそうな気がした。
「欲しくてたまらないんだろう！　この淫乱マゾ皇帝め」
老大使が張り型の動きをいきなり止め、ゆっくりと引き抜きにかかる。張り型に絡みつ

いた鎖も同時に引き出されていく。
「あひぃぃぃンっ！　ぬ、抜かないでぇ！　あきゃあぁぁぁぁぁんっ！」
それがどんなに浅ましい台詞か省みる余裕もない。一つまた一つと鎖の節が子宮口から産み落とされていくたび、壮絶な快感が身体を真っ二つに引き裂いた。目の前で真っ赤な火花が散り、脳内に無数の星が砕けていく。
「抜かないでくれとは……ヒヒヒ。それが本音のようじゃな」
ニヤニヤと満足の笑みを浮かべ、抜いたばかりの張り型を今度は薔薇の咲き誇るアヌスにドスンと撃ち込んだ。
「お尻ぃ……あぁぁ――――――――――ッ!!」
ローザは陸に上がった魚のように、腰を跳ねさせて歓喜のダンスをしてしまう。
「ペニスなしでは生きられぬ、それがお前の本性だ」
荒馬のように腰を振りながらアルベルトがイラマチオで迫る。食道近くまで剛棒が出し入れされ、口腔粘膜をイボに擦られる。窒息しそうな苦しさなのに、勃起から唇を離せない。舌がチロチロ動き出してはイボ突起に絡みついていく。
「こんな風に辱められて、オマ〇コを濡らして感じてしまう。それがマゾの証拠よ」
乳房をギュウギュウと揉み、乳首を擦り上げ、ブリジットも責めを強めてくる。子宮の中で洗脳波を送り込んでくる子宮枷の振動も激しさを増す。ジンジンと熱く疼く子宮から、甘美な痺れが全身に広がり、あちこちで乱反射してはさらに淫欲の火を灯す。
「んぐ……むぅ……はあ、はあぁぁ……も、もう……わたしぃ……」

鎖を引かれたり緩められたりするたび、お腹が捲り返りそうな快感の爆発が子壺に連鎖的に湧き起こる。とろけきった子宮を持ち上げんばかりに極太ディルドウがズンズンとアヌスを抉った。このまま拒否し続ければ自我まで壊されてしまいそうだった。

「んぐ……むふぅ……ちゅぱ……あ、ああ……わ、私はぁ……」

「認めろ。お前は輪姦されるのが好きなマゾの変態だと。さもないと」

喉奥からペニスが反転して引き抜かれていく。その空隙、一瞬生まれた真空にローザの意識は吸い込まれてしまう。

「はあぁ……マ……マ……ああ……マゾ……ローザはマゾですぅっ！　あああぁ！」

我を忘れて叫ぶ。堕落を認める自分の声が、操られたモノなのかもうわからなかった。

「ああぅうン……ローザは……皇帝の身でありながら……ハアハア……り、輪姦されるのが……大好きな……ああ……変態……なんですっ！　ンああぁぁぁぁっ！」

ここまで追いつめられては女体の暴走は止まらない。荒い呼吸に突き上げられ乳房はプルプルと波打つように変形する。腋の下や乳房の谷間に甘酸っぱい汗が湧き出して、芳しい牝のフェロモンを観衆にまで届けてしまう。瞳は焦点を失い、緩んだ口元からは涎まで垂れてしまう。乳首もクリトリスも痛いほど膨らみきっている。吊り上げられた腰がビクンビクンッと痙攣し、太腿が筋張って爪先が反り返る。

「よく言えたな、ローザ。ご褒美にお前の大好きなミルクを飲ませてやろう！」

ウオオオッと吠えたあと、アルベルトがローザの唇に肉槍を深々と突き立てた。

ドピュッ！　ドピュッ！　ドビュルルルルゥゥッ！

「んむぐぅっ……あぁ……みりゅく……んぶぅ……ごくごくん！」
濃厚に絡みつく白濁粘液をローザは喉を鳴らして飲み干していく。喉を灼く熱さ、脳を焙る生臭さ、それらすべてが心地よい。
「たまらん、でるぞ！」「二人とも受け取れ！」
妖艶な色香に巻き込まれ、包囲していた男たちも射精を開始する。
搾りたての熱い精が金と銀のブロンドを穢し、肌に堕落の刻印を押しつける。その汚辱感が今の自分には相応しく感じられ、もっと汚されたいという気持ちがこみ上げる。
「ああ！　もっと、もっとかけて！　あふぅん！　変態のローザに……はぁはぁ……おチンポ汁……もっとくださいぃ！」
狂ったように恥声を振りまく奴隷聖帝に、シャワーのように精が浴びせられた。視界が白く霞み、呼吸するたび精液の匂いを肺腑に染み込まされる。
「アアァ、アハアァァンッ！　よく言えましたぁ！　聖帝様ぁ！　ンアアァァ！」
自らも枷の刺激に酔いしれながら、ブリジットが思い切り腰をスイングさせる。勢いで最後の枷の先端部分がぢゅぽんと抜け出した。
「ンあぁぁぁ――――――――――ッ！」
赤い稲妻が脊椎を灼きながら駆け上がり、脳底に突き刺さる。脳細胞が沸騰し、意識は蒸発した。散り散りになった自我が、七色に煌めく官能の頂上に打ち上げられた。
「ヒィィッ！　ヒあ、ああぁぁっ！　イ、イクッ！　イクイク……イっちゃうぅっ！」
銀髪をザッと振り乱し、ローザは総身を揉み搾る。見開いた瞳は完全に焦点を失ってい

『第六章　競艶・百合と薔薇』より　その１

舌に感じる熱さも硬さも、これまで以上に逞しく感じられた。自分を支配するに相応しい男、父性の象徴のように思えてくる。

「そうよ、ローザちゃん。その調子。ほらもっと、お乳も使って」

「うう……は、はい……お……お姉様……」

ブリジットに倣ってローザも渋々と乳房を男根に押し当てる。四つの柔らかな乳白色の肉球が、ブルンブルンと弾みながら父の剛棒を全方位から圧迫した。その間も舌唇は休まず動いて、鈴口から湧く牡汁をペロペロと舐め取っていく。

「フフフ。姉妹でリズムも合っているではないか」

乳肉に包み込まれる快感にアルベルトは涎を垂らさんばかりに頬を緩ませた。張りのある若々しいブリジット姫の乳と、たっぷりと豊満な聖帝ローザの乳房は、それぞれ自己主張しながら自在に形を変え、競い合うようにペニスに快感を流し込んでくる。

プリプリと弾む弾力と柔らかくとろけるような温かさが、交互に或いは同時にペニスを包み込んで、快楽の二重奏を奏でる。テクニックも申し分なく、膣肉にも匹敵する快美感が睾丸まで痺れさせた。

そんな肉体的な快感に加えて、絶世の美女と美少女の競演奉仕である。視覚の刺激は最高潮だ。しかも二人とも一国の王女と皇帝という高貴な立場なのだ。男としてこれ以上昂奮するシチュエーションは存在しないだろう。

「はあはあ……ほら、ローザちゃん。もっとお父様を悦ばせるようなことを言うのよ」

ブリジットは姉奴隷として積極的にローザを淫界に導こうとする。仮面の奥、無表情だ

った碧眼にも徐々に昂奮の色が滲み、嗜虐的な笑みが唇の端を鋭角に持ち上げている。蛇のように長く伸びた舌が男根を舐め上げる仕草も、完全に楽しんでいる感じだ。

（ああ……ブリジットが……こんな風にされてしまうなんて……）

妖魔の洗脳の恐ろしさをヒシヒシと感じるとともに、自分ももう逃げられないのだという諦めが弱体された心に忍び寄ってくる。

「はあう……お、お父ちゃまの……うう……お父様の……おっきな、オチンチン……くちゅ……ローザ……大好きなの……ああ、こんなに太くて逞しい……お父様のオチンチンをペロペロできて……はあぁン……ローザは幸せでちゅ……くちゅん……ああぁむ……ン」

（こんなこと……思ってないのに……どうして……胸がドキドキして……）

幼児語も交えた恥ずかしく惨めな台詞を言わされているうちに、ますますローザの心は幼く退行していく。何もかも忘れて、目の前の『父』に甘えてしまいたくなる。そこに淫らな肉悦も混ざり合い、ローザは被虐の底なし沼へと引きずり込まれそうになる。

男根奉仕する乳首はいつしかピンと尖り、ブリジットのツンと硬いニップルと擦れ合うたび、ビリビリと快美電流が乳肉を貫いていく。もっと強く揉みしだかれたいという欲求が乳房全体を熱く焙って汗ばませ、男根への奉仕を大胆にさせるのだった。

「はあはあ……お、お父……様……ローザのお口……くちゅ……き、気持ち……あうぅむ……いいですかぁ……お父様……ちゅっ、ちゅぱぁ！」

甘えながら息を弾ませ上目遣いの視線を送るローザ。何度もお父様と言わされるうちに、次第にアルベルトを父と呼ぶことに抵抗がなくなりつつあった。それどころか憎い男を父

と呼びながら倒錯奉仕をすることが、ローザの魂に禁断の快楽を深く刻み込んでいく。
「フフフ。私の娘らしくなってきたな。まずはミルクを飲ませてやろう」
傲慢に反り返った勃起の中を、激しく血流が駆け巡る。両手に花の昂奮が官能中枢を暴発寸前に煮えたぎらせ、射精快感への期待に海綿体が膨れ上がっていく。しかもかつて自分に刃向かった女たちが、従順にひざまずき献身的な奉仕をしているのだから最高の気分である。
「お父様、飲ませてぇ。あぁぁん、ブリジットのお口にたくさん注ぎ込んでぇ」
ブリジットが思い切りおねだりしながらローザと乳房を摺り合わせた。ギュッと圧縮された十字の中心で、勃起がビクビクッと痙攣する。
「おおっ。締まる！」
強烈な乳肉の締めつけが、あたかも二人の膣肉を同時に犯しているような快感を与え、アルベルトのボルテージは最高潮に達した。
「ンあぁっ。飲ませてくラさい……はあぁ……お父……様の……ミルク……ローザにいっぱい飲ませてくださいぃ」
姫奴隷の昂奮にシンクロしてしまったように、ローザが叫んだ直後――――。
ブシャアアァァァッ！　ドビュドビュドビュウゥゥッ！
男根がポンプのように拍動し、灼熱の淫濁液を大量にぶちまける。
「んぐぐっ……ごくっ、ごくっ……んは、ンきゅうっ！」
間けつ泉のように湧き上がる邪精を、二人は喉を鳴らして飲み干していく。二人がかり

『第六章　競艶・百合と薔薇』より　その２

聖なる剣であらゆる敵を薙ぎ払い、国民からも絶対の信望を集めていた聖帝が、何も抵抗できず獣欲に穢されていく様を見て、アルベルトは溜飲が下がる思いだ。
「だがお前が感じていいのは父のチンポだけだ。これから死ぬまで一生な」
ジュボッ！　ズブブブッ！　グチュッ！　ジュププ、ジュプゥッ！
「あ、あぁンっ！　パ……パパ……ああぁぁン！　ラめぇ……んんちゅっ！　もう出しちゃらめぇ……ンぷぅ……こ、これ以上ラされたら……あふぅんぅ……パパの……あ、赤ちゃんできちゃうよぉ！　んっ、んっ……ンあぁぁぁん！」
イヤイヤと首を振りながらも、膣肉も唇も男根にしっかり絡みついている。エクスタシーの余韻が消える間もなく全身が官能の嵐に呑み込まれ、壊れたオモチャのようにガクンガクンと痙攣が走る。小振りなお尻もクネクネ揺れて、狂父と息を合わせたペアダンスを踊り出した。ヌチャッヌチャッと淫らすぎる水音が響き、どす黒い肉棒と桜色の粘膜との間に、濃密な相姦の粘り糸を紡いでいく。
「クククッ。輪姦されておるのに、オムツまでグッショリとは」
「聖帝様は生まれつきのマゾ、変態皇帝というわけじゃな。ほれ、もっと舌を使え」
幼い容貌の中にも妖艶な反応を示すローザに、男たちは昂奮を掻き立てられ、イラマチオと手コキのペニスがビクビクと脈打ち始める。
「ンあ……ああ……ロうちて……ぷは……あ、赤ちゃん……レきちゃうのに……はああ……みんなにされる……なんて……んぶぅ……いやなのにぃ……ああ、あぁンっ！」
掻き混ぜられる子壺から、被虐の愉悦が波紋のように全身に広がっていく。細胞の一つ

一つが発情させられ、イクこと以外考えられなくなる。ググッとくびれの少ない腰が反り、無毛の肉土手が父の男根にむしゃぶりついていく。

可憐な唇が男根に媚びて、滑らかな亀頭を哺乳瓶のように情熱的に吸いしゃぶる。両手も精一杯太幹の上を滑って、二本の勃起に愛撫を加えていく。

（ああ……オチンチンが……いっぱい……）

幼化された身には、手に余り、顎が外れそうなほど大きく感じられるが、それがかえって頼もしく感じられた。いつしか全部が父のペニスのようにも思えてきて、被虐奉仕にも熱が籠もる。肌や粘膜が射精の気配を感じ取り、異様な昂奮に身体のコントロールは失われてしまう。

「くうっ！　たまらねえ」

「おおっ！　出るぞ！　ぶっかけてやるぜ、聖帝様よ！」

両手の中で同時に男根が戦慄き、射精が始まった。

ブシャッ！　ブシャッ！　ドピュゥッ!!

「んはぁっ、あぁぁっ！」

左右から飛び散った白濁が、幼女帝の童顔を灼熱でひっぱたく。柔らかいほっぺたに粘りつき、ドロリと垂れ下がる様は背徳的でありながら美しい。

「俺も出してやるぜ。一滴残らず飲み干せ！」

ドピュッ！　ドクドクドクドクゥッ！　ドバドバァァッ！

「あぐぅっ！　んむっ……ごくごくっ……ごきゅ……んむぅ……！」

続けざまに口腔内でも獣精が爆発した。何度も何度も脈動を繰り返しながら、半固形の粘度を持つ汚精液を聖帝の唇に送り込んでくる。小さな舌を必死に動かすもののとても飲み下しきれず、唇から溢れた白濁が頬をベトベトに濡らしていく。

（すごい……こんなにいっぱい……）

呼吸するだけで濃いザーメン臭が肺いっぱいに満ちてきて、ローザはフラフラの状態になってしまった。舌に絡まる塩苦い味に対する嫌悪感もどんどん薄くなっていく。

「私のミルクも飲ませてあげますよ、ローザ様」

すぐに別の男が入れ替わり、唇を犯された。両手にも新たな勃起が握らされる。

「んっ……ぐっ……むぅ……あひゅぅ……あ、あぉぉ……ああん！」

休む間もなく食道近くまで突き入れられ、頭が激しくガクガクと揺さぶられた。アルベルトと息を合わせて、二本の極太男根が同時に入ったり出たりすると、身体を一本の杭で串刺しにされてしまったような気がしてくる。小さな身体は激烈な牡の淫欲に巻き込まれ翻弄され、被虐官能の嵐の中、木の葉のように舞い踊らされる。

（こ、こわされちゃう……！　アタチ……おかしくなっちゃうぅ！）

ズーンズーンとハンマーを撃ち込まれるような衝撃波が、骨格を軋ませ、頭蓋を揺さぶる。往復のたびに胃と子宮に充填された精液がタプンタプンと波打っているのがわかった。まるで精液の詰まった樽にされてしまったよう。

（それなのに……こんなひどいことされて……どうして……）

徹底的な色責めを受けているうちに、ローザの小さな身体に変化が起こっていた。

それまで犯されるままに受動的だったのが、積極的に動き始めたのだ。子宮も膣肉も、男根を搾るだけの淫欲器官に成り下がり、ギュウギュウと締めつける。舌も勃起に絡みついては頬をへこませたバキュームを断続的に繰り返す。

（お股が……お口が動いちゃうの……と、とまらない……）

小鼻を膨らませ、唇を突き出したフェラ顔が滑らかに往復し、漏れ出る熱い吐息が男の陰毛をそよがせる。父の精を求めて収縮する膣襞から、ジュワァッと牝蜜が溢れ出た。

「自分から腰を使いおって。やっとお前もその気になってきたようだな」

「あ、ああ……ちが……むぅんっ……ちがうの……くちゅっ……んっ、んふぅン！」

言葉ではかろうじて否定するものの、勃起を吸いしゃぶる表情はうっとりと溶け、虚ろな眼差しは宙を彷徨っている。ほっそりした脚を宿敵の腰に巻きつけ、クイックイッと腰をすり寄せてしまう。

「ううむっ。そんな顔でしゃぶられてはたまりません！」

口を犯していた男はローザの魅力に性感を直撃され、早くも射精してしまう。

「んぶっ！　うぐぐぅぅ……ごく……ごく……ごく……ン」

ローザはもはや抵抗できず、吐き出された精液を従順に飲み干していった。飲むほどに心が腐敗し、自我の壁が崩れていく。それがわかっていながら、飲精をやめられない。強要されたからではなく、心の奥底で何かがそれを求めている。高貴な聖帝は幼いながらに男たちから奴隷のように扱われ、奉仕させられる悦びに目覚めつつあるのだ。

「ハアハア……ああ……」

焼けつくような官能の炎に包まれ、銀髪少女は女の腰使いでオムツ尻をローリングさせた。白濁と牝蜜でぐっちょり濡れたオムツが密着すると、自分の淫らさを自覚させられ、マゾの昂奮を呼ぶ。背徳の結合部からグチュグチュと淫靡な音を響かせ、濃厚な本気汁を父の男根にたっぷりとまぶしていく。

朦朧とする頭の中に、またしても父に犯されている自分の姿が浮かんだ。

（ああっ!?）

今度の幻視はさらに衝撃的で、ローザは臨月の妊婦だった。ボテ腹を揺すりながら四つん這いで父に犯され、乳房からは母乳の滴まで飛び散っている。

それは未来の暗示なのか、願望なのか。背徳すぎる光景にローザの心は釘付けにされ、得体の知れない昂奮が身体の中心を貫いていった。

「あ、ああ……パパッ……パパァァッ！」

抑えきれない感情が叫びとなって迸る。人形のように華奢な身体が突っ張って、断末魔の痙攣が走り抜ける。手を押さえられてなければ抱きついていただろう。

「クフフ。私の愛を受け止めるがいい！　我が娘よ！　うぉぉっ！」

野獣のように咆哮し、アルベルトの剛棒が一際深く突き込まれる。直後イボだらけの胴部がポンプのように拍動した。

ドビュッ！　ドビュッ！　ビュルルルルッ！　ドクドクドクゥッ！

凄まじい射精が、ローザの子宮にぶちまけられる。ヤケドしそうなほどの熱さを伴う重さが、お腹いっぱいに膨らんでいく。

「アヒィィィッッ！　パパァァ……アアァァァァ〜〜〜〜ンッッ！」
生臭い精臭をまき散らし、ローザは嫌悪とも快感ともつかない悲鳴を迸らせた。
偽父の勃起に染められてしまった子宮に、灼熱の精が浴びせられるたび、ローザの脳内に赤い雷光が明滅した。幼げな腰も、女の快感を訴えて勝手にくねり舞う。止められない肉悦の熱波が、全身を包んで焼き尽くす。その熱気はすぐさま尿道にも燃え移った。
「あぁあぁ……漏れちゃうっ！　ああ、イクッ！　ハヒィィンン……赤ひゃんできちゃうのにぃ……ンはぁぁっ！　イクッ、イっちゃうのぉっ！」
プッシャアァァァァァッ！
噴水のような失禁と同時に、敗北の言葉を振りまくローザ。身体がまったく言うことを聞かず、宿敵の腕の中で弓なりのアーチを描き出す。バラバラに振り乱れたプラチナブロンドが、汗を飛ばして扇状に広がった。
（いっぱい……出てるぅ……パパのが……中に……アソコの中にぃ……）
これまでも何度も犯されたが、ここまで狂わされたことはなかった。聖気という防御を失い、直接精を子宮に浴びることがこれほどの快感を呼び起こすとは。そして気づかされる、快楽の源が近親の背徳感なのだと。それが子宮に根付いてしまったことを。
「まだまだ出るぞ。ほれほれぇ」
休む間もなくビュクッビュクッと膣奥に射精され、ローザの意識は絶頂のさらに上に打ち上げられた。射精のリズムにリンクするように、ローザの尿口からもオシッコがビュッ、ビュッと迸った。まっ白な光が砕けて闇が現れ、その闇が裂けてまた白光が満ち溢れる。

「ラめぇ……そんなに出しちゃあぁ……ああ……イクッ……イクゥ……ンあぁぁぁん……ローザ……イ、ィィ……イク、イっちゃうのぉッ！」
連続絶頂で子宮も柔襞も淫らに蠢いて、白濁流を奥へ奥へと導いてしまう。大量の精が子宮の中で渦を巻き、さらに卵管へと遡上し、そこにある卵子と混ざり合うのだ。
（このままじゃ……ほんとうに……赤ちゃん……できちゃうぅ……っ）
自分の孕み姿を魂に刻み込まれ、ローザの精神は夢幻の高みへと飛翔していった。

それからどれだけ時間が経っただろうか。
ローザはいまだにアルベルトたちに犯され続けていた。胡座の上に跨がされ、抱きつくような格好で串刺しにされている。幼化の術は解かれ、肉体は大人の姿を取り戻していたが、心は淫霧に包まれたまま子供と大人の間を行き来していた。
「ほれぇ、これでちょうど百発目だ」
ドビュッ！　ドビュッ！　ドビュルルウウゥゥッ！
「ンあぁぁぁ……あ、あっ……ィック……イクゥ……」
近親子宮内射精の快感にローザはビクビクと汗まみれの身体を痙攣させる。もはや理性はほとんどなく、エクスタシーを告げる牝声も弱々しい。
「フフフ。もう一押しだな」
あの聖帝がいよいよ完全な奴隷に堕ちるのだと思うと、いやがうえに昂奮が増す。アルベルトは血走った視線をローザのお腹に向けた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ちょっと大人のライトノベル

あとみっく文庫

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE INFORMATION NEWS

最新刊のお知らせ

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス ②

42兆円踏み倒してやりますわ

借金返済のため、お嬢様が工事現場で肉体労働…ストリップまで!?

セレブ界も格差社会だ!!

小説／筑摩十幸　挿絵／了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス

42兆円を稼ぐまで返してやりますわ

セレブな生活を取り戻すために魔物にバトルを挑む元・令嬢!

小説／筑摩十幸　挿絵／了藤誠仁

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!